授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1456 号

予防型家庭訪問が高齢者のソーシャル・キャピタル効果に与える影響　―北海道・寒冷地域における無作為化比較対照研究―

(The effect of social capital on elderly residents by preventive home visits: A randomized controlled trial in cold areas in Hokkaido)

岡本　裕樹（おかもと　ひろき）

博士（医学）

論文内容の要旨

本研究は、寒冷地域に居住する 65 歳以上の高齢者を対象に、「在宅高齢者生活機能向上ツール（FIT)」 を用いた家庭訪問の介入群、ツールを用いない非訪問の対照群による無作為化比較対照研究を実施し、家庭訪問によって両群のソーシャル・キャピタル（social capital　以下 SC）が影響されるかどうかを検討することを目的とする。FIT は、高齢者と訪問者が対等な関係を築き、共に話し合いながら高齢者自身が生活目標を見つけ、自己の役割を再確認するツールであり、自己効力感や主観的健康度の向上、自己疎外感の低下などが期待される。調査は、2008 年 10 月～2009 年 3 月に北海道新ひだか町静内地区、日高町門別地区、日高町日高地区の 2 町 3 地区で実施した。対象者は同地区の自宅居住者で 65 歳以上の高齢者のうち、自身で身の回りのことができ、自由に外出できる要介護度 1 以下とした。介入群 92 名、対照群 99 名に対して介入前後の計 2 回、両群の SC 変数を測定し、両群の平均値の変化を比較した。SC 変数として、認知的 SC では「一般的信頼」、構造的 SC では「社会的役割」「社会参加」を使用した。交流指数は「別居家族との交流」「別居家族の有無」「緊急時、すぐに駆けつけてくれる人の有無」「看病してくれる人の有無」と定義した。解析は対応のある t 検定並びに性別、年齢、教育年数、交流指数、年収、抑うつで調整した共分散分析（analysis of covariance：ANCOVA）を行なった。介入群では「社会的役割」「社会参加」に有意な減少が認められた（いずれも $P<0.05$）。一方の対照群では「社会的役割」は微増したものの有意な変化は見られず（$p=0.64$）、「社会参加」に有意な減少が認められた（$p<0.05$）。共分散分析の結果、「一般的信頼感」「社会的役割」に介入群と対照群で有意差が認められた（いずれも $P<0.05$）。今回の結果、介入群は FIT を介して他者とのつながりやコミュニケーションを図る意識は高まったものの、介入時期が冬期であったことから頻繁にわたる別居家族や友人などとの交流が難しく、SC が下がった可能性が示唆された。